鳥取大学医学部75周年

鳥取大学医学部（米子市西町、中村廣繁学部長）の創立75周年記念式典・記念講演会が6月5日に開催される。前身の米子医学専門学校開校から昨年で75年。診療、教育、研究の各分野で山陰の医療を支え続けてきた。その足跡と使命を見つめ、未来を展望する。

広告特集　企画・制作／新日本海新聞社地域プロデュース局

ごあいさつ

鳥取大学　学長　中島 廣光

米子医専を源流とし、米子医大を前身校として誕生した鳥取大学医学部は、米子医専から数えて創立75周年を迎えました。米子の地で時代とともに発展し、現在は医学科、生命科学科、保健学科の3学科と附属病院を中心に、教育、研究、社会貢献活動を活発に展開しております。これからも、医療人養成と医学研究、地域医療と高度医療の拠点として、地域から愛され、そして社会から必要とされる学部として地域とともに発展して参りますので、これまでと変わらぬご理解とご支援、ご協力を、よろしくお願い申し上げます。

鳥取大学医学部同窓会　会長　魚谷 純

鳥取大学医学部同窓会は、会員相互の親睦と学術の向上を図り、鳥取大学医学部の発展に尽くすことを目的としています。

現在、1万人を超える同窓生が、山陰はもとより全国各地で活躍しています。学生時代をこの米子キャンパスで過ごしたことに誇りと愛着を持ち、育ててくれた母校に対する感謝の念が同窓会活動のエネルギー源であり、母校の発展の様子が心の拠り所です。

創立75周年にあたり、関係各位に心より御礼申し上げ、鳥取大学医学部の今後益々の発展を願っています。

祝辞

鳥取県知事　平井 伸治氏

創立75周年を迎えられたことに対しまして、鳥取県を代表し心よりお祝い申し上げます。

鳥取大学医学部は、創立以来長きにわたり優秀な医学・医療人材を多数輩出され、地域医療の発展に貢献してこられました。鳥取県は、今地域をあげて、新型コロナの感染拡大防止と治療、命と健康を守る医療提供体制の確立に向けてまい進しています。鳥取大学医学部こそ、その扇の要として、新型コロナ後の新たな時代へと導いてくださいますようお願い申し上げます。

鳥取大学医学部の益々のご発展と皆様方のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。

米子市長　伊木 隆司氏

国立大学法人鳥取大学医学部が創立75周年を迎えられましたことを、心からお慶び申し上げます。

鳥取大学医学部におかれましては、前身の米子医学専門学校が本市に開校されて以来、優秀な人材を数多く輩出され、先進医療や先導的な研究により地域医療発展の牽引的役割を果たしていただいております。また、昨今のコロナ禍においても、専門的な知見、高度な医療により地域住民の安心・安全を守る要としてご尽力をいただいておりますことに深く感謝を申し上げます。

創立75周年を迎えられ、今後益々ご発展されますことを心から祈念いたします。

鳥取県医師会　会長　渡辺 憲氏

鳥取大学医学部創立75周年を心よりお祝い申し上げます。

前身の米子医学専門学校が1945年に開校して以来、75年の長きにわたり医師育成にご尽力いただき、卒業生は山陰両県のみならず、全国において地域医療、医学教育・研究、保健医療行政等、幅広い分野で優れたリーダーシップを発揮し、活躍しておられます。

本医師会も、1947年設立以来、当県の地域社会を健康・医療面で支えてまいりました。今後、貴学部とともに歩みを続け、地域の発展にますます貢献できればと願っております。

継往開来～未来へ継ぐ～

未来へ

インタビュー　中村廣繁医学部長

100周年に向け、地域とともに発展

「継往開来～未来へ継ぐ～」を創立75周年のスローガンに掲げ、新たなスタートを切った鳥取大学医学部。中村廣繁学部長に、地域や未来への思いを聞いた。（聞き手は新日本海新聞社西部本社主幹・寺谷寛）

―75周年をどう位置付けますか。

100周年という大きな目標に向け、持続的に発展するための大きな節目と捉えています。今、全国の医学部がさまざまな課題を抱え、岐路に立っています。生き残っていくためには、もっと私たちの特長や強みを打ち出していかなくてはなりません。節目は変わるチャンスでもあります。コロナ禍で時代の変化も加速しています。過去を振り返りつつ現状を見直し、新たな目標に向かって皆で心を一つにしたいと思います。

―新たな動きは。

今後の方向性を考える上で重要な意味を持つのが、情報通信技術（ICT）や人工知能（AI）などを活用したデジタルキャンパス構想です。建て替えを視野に入れた附属病院のスマートホスピタル構想、米子市のまちづくりの構想と歩調を合わせて推進したいと思います。コロナを含めた未知の感染症への備えを強化することも重要です。背景にある環境問題への取り組みとして、約千五百人いる学生の力も生かし、キャンパスの美化や環境保護などに取り組む「クリーングリーン運動」も展開します。

―診療、教育、研究という不変の使命もあります。

診療については、3次医療を担う「最後のとりで」として、兵庫県北部から島根県東部、岡山県北部を含めた100万人医療圏を視野に、地域の医療を支えているという自負があります。

医学教育では、コミュニケーションとイノベーションを重視し、人間力と創造力あふれる全人的医療人の育成を目指しています。地域に開かれたキャンパスとして、市民の皆さまや次世代に向けた情報発信にも力を入れたいと考えています。

研究活動は、人材育成という点でも、医学の発展に貢献するという大学の使命を果たすという点でも重要です。成果を地域に還元するためにも、産学官連携や共同研究を推進したいと思います。

―地域との関わりも重要です。

ここは交通の便も良く、米子城跡や中海などの豊かな自然もあります。これほど恵まれた環境にある医学部はそうありません。県外出身の学生も多いですが、地域と関わる機会を増やし、愛着を持ってもらいたいと思います。

―今後の展望とメッセージを。

当学部は地域の皆さまに支えられ、75周年を迎えることができました。山陰地方で最も長い歴史を持つ医学部として、この地域の医療を守り続けてきたという誇りを持ち、今後も地域とともに発展していきたいと思いますので、ご理解、ご支援をお願いいたします。

新型コロナに立ち向かう

専門分野中心に総力挙げて対峙

千酌浩樹教授

景山誠二教授

最前線の診療と並行し、感染症専門医の育成が進む

新型コロナウイルスの脅威が続く中、鳥取大医学部は基礎・臨床の専門分野を中心に、総力を挙げて対峙してきた。そのパワーは、コロナに立ち向かう鳥取県全体の原動力となっている。

附属病院では、感染症内科などを中心に診療体制をいち早く確立。最前線でコロナと闘いつつ、昨年10月には感染症専門医を育成する県の寄附講座「臨床感染症学講座」が誕生した。

感染症専門医の資格を取得するには、医学部卒業後、8年程度を要する。同講座の千酌浩樹教授は「講座の役割は、専門医育成の仕組みを稼働させること。時間はかかりますが、県民の健康を守るためにも、世界のためにも絶対に必要です」と断言する。

感染症内科ではすでに専門医を志す医師が育ちつつある。しかし、臨床感染症学講座は、全国の国立大学でまだ7講座しかない。「人・病原体・治療を総合的に捉え、最適解を見付けるのが感染症専門医。コロナを克服できても、未知の感染症との闘いは続きます。医学と社会の中に防衛方法を確立することが急務です」（千酌教授）。

景山誠二教授（ウイルス学）は、基礎医学の見地から行政と連携して対策に取り組んできた。予防のための県民への啓発、徹底した検査、病床の確保、開業医の協力体制など、鳥取県の機動的な取り組みは全国的にも高く評価されている。

「次の医療」への光を見いだすことも、研究者としての大きな使命と捉えている。景山教授は「地方だからこそできることがあり、鳥取県で積んだ経験は、ほかの地方でも生かせるはずです。感染症対策の分野で鳥取発のモデルを発信し、世界に貢献したい」と話す。

地域医療

鳥取を愛する医師を育成

谷口晋一教授

福本宗嗣特命教授

臨床実習で在宅医療の現場を体験する学生

「鳥取の人や風土を愛し、地域に必要とされる医師を育てたい」―。地域医療学講座の谷口晋一教授は、医療を通じて地域を支える総合診療医の育成に力を注ぐ。

同講座は2010年、地方の医師不足が課題となる中、地域医療を担う人材を専門的に育てようと開設された。学びの場づくりと地域医療の支援を兼ね、日野病院に地域医療総合教育研修センター（14年）、大山診療所に家庭医療教育ステーション（19年）を設置。医学教育でも患者を総合的に診療するプライマリ・ケアの重要性が認識され、現在は新専門医制度による総合診療専門医の育成も進む。

来年には、同講座から第1世代となる専門医が誕生する見込みだ。近年、県外に出た卒業生が指導医として戻るなど、志ある人材が集い、マンパワーも高まっている。谷口教授は「患者さんを深く理解し、体も、心も、地域も診るのが総合診療医。今後は活躍できる場の整備や研究体制も強化し、次に続く人材を育成していきたい」と展望する。

制度面の後押しもある。鳥取県で働く医師を育成するための県の奨学金制度だ。複数の制度があり、返還免除要件が異なるなど複雑な面があるため、県と附属病院で組織する鳥取県地域医療支援センターが、キャリア形成などを支援している。

20年1月時点で、県内（43病院）の医師の充足率は82.8%と、約235人が不足している状況だ。医師の育成には長い時間がかかる。同センターの福本宗嗣特命教授は「奨学金制度を活用してもらいつつ、本人の希望に沿ったキャリアを積み、患者さんとしっかり向き合える医師に育ってほしい」とエールを送る。

使命

研究　鳥取県から全国、世界へ―

医学科

海藤俊行学科長

山陰で最も歴史のある医学部として、この地域の医療を守り、発展させるという使命はもちろん、全国、世界に通用する研究を目指すという気概を持ち、皆が懸命に取り組んでいます。

医療技術は日々進歩していますが、今も治療が困難な病気は多く、挑戦すべき課題はまだまだあります。医学科では、遺伝子や分子のレベルで病気の原因を解明するとともに、再生医療や新薬による治療法を開発しています。

誰も知らないことを初めて発見し、それが患者さんの治療に結び付いた時の喜びは何物にも代え難く、波及効果も大きい。山陰で暮らす皆さんの生命と健康を守るために、今後もまい進していきます。

生命科学科

畠義郎学科長

充実した環境で研究に打ち込む生命科学科の学生

全国で初めて医学部に設置された生命科学科として、医療に関わるテーマを中心に、基礎と応用の両輪で研究を行っています。

中でも注力しているのが染色体工学の分野で、染色体工学研究センター、とっとり創薬実証センターなど、研究から実用化へとつながる充実した環境も他にない強みです。

私たちは、研究面で医学部全体の力を押し上げる拠点でありたいと考えています。近年、基礎研究から応用への流れが加速し、研究者は今まで以上の責任も問われています。

社会との関わりを意識しつつ、世界トップレベルの医学・生命科学研究をけん引するとともに、行政や企業などとも連携し、地元の発展に貢献したいと願っています。

保健学科

深田美香学科長

保健学科では、研究、教育、地域貢献を一体的に捉えています。研究テーマは幅広く、膝痛の自己管理法▽転倒・骨折要因の検討と骨折予防教育プログラムの開発▽高齢者の見守り支援の実態調査▽ICTを活用した在宅酸素療法の遠隔モニタリングシステム開発―など、フィールドとして地域に積極的に出ています。

看護学、検査技術科学の2専攻がありますが、大きな目的は、専門職として地域で暮らす人の健やかな生活を支援することです。医療は病院だけでは完結しません。今後はもっと学生と一緒に活動し、地域との距離も縮めたい。その人らしく生き生きと暮らすために、地域の課題も含めて考えていきたいと思います。

診療　高度先進医療を果敢に推進

原田省病院長

診療面では、この地域の「最後のとりで」として高度先進医療に果敢に取り組み、山陰の医療をリードしている。全国に先駆けて附属病院に導入された内視鏡手術支援ロボット「ダビンチ」は、症例数1500例を超え、救急医療では鳥取県ドクターヘリの基地病院として、圏域の医療体制を支えている。

10年前、ダビンチ導入を機に設立された低侵襲外科センター。初代センター長を務めた原田省病院長は「ロボット手術を安全に行うという共通の目的のため、診療科や職種の枠を超えた真のチーム医療が芽生えた」と振り返る。大学病院の殻を打ち破る大きな一歩であり、高齢化が進む山陰地方で、体への負担が少ない低侵襲治療を推進する原動力となった。

附属病院の職員数は約1800人、患者を含めた滞留人口は1日約6000人に及ぶ。その影響力や発信力を踏まえ、「働きやすさトップクラス」を目指す職場環境づくり、広報誌「カニジル」発行、外来患者のための呼び出しアプリ「とりりんりん」の運用など、さまざまな面で進化を続けてきた。

全国有数の実績を誇るロボット手術

附属病院の理念は、4月から新たに「地域と歩む高度医療の実践」とした。10年先を視野に入れた新病院開発の計画も始動する中、原田病院長は「大学病院は地域の共有財産。山陰の高度医療を担う特定機能病院として十分に活用してもらうためにも、地域と連携し、さらに発展させていきたい」と未来を見据える。

教育　人間愛と創造力に満ちた医療人を育成

医学教育では、コミュニケーションやイノベーションを重視し、人間愛と創造力に満ちた医療人の育成に努めている。医学教育学分野の植木賢教授は「知識、技術に加え、医療人として最も重要なのは心の在り方。患者さんの役に立つことを自らの喜びとし、主体的に行動できる人財を育成するプロフェッショナリズム教育を大切にしたい」と話す。

医学教育は、標準的な教育プログラムに大学独自の特徴的な教育を組み合わせて構成される。鳥取大学では、コミュニケーション教育として、地域の保育園や高齢者施設での実習、手話言語教育などを行っているほか、独自に開発した機器などを活用したシミュレーター教育を通じ、実践的な学びを重ねている。さらに、発明の楽しさを伝えようと植木教授が考案した「発明楽（がく）」を学び、発見・発明をイノベーションへと展開する力を養っている。

発明楽の原点は、人口最少県である鳥取県、そして地方大学が生き残るために何ができるのか、という問いだ。答えの一つが、現場のニーズに基づいた医療機器の開発。新規医療研究推進センターを核にチームも生まれ、すでに25の製品が実用化されている。

教育も医療機器開発も、根底にあるのは「患者さんのために」という思いだ。植木教授は「30年後には30年後の課題があり、それを解決する人財が必要。既成概念に捉われず、異分野の人と協力し、患者さんのために行動できる医療人を育てたい」と力を込める。

シミュレーションセンターで、採血などの手技を学ぶ保健学科の学生

記念式典・講演会

鳥取大学医学部創立75周年記念式典・記念講演会が6月5日、米子市久米町のANAクラウンプラザホテル米子で開催される。当初は昨年秋に予定されていたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期されていた。オンラインとのハイブリッド形式で開催され、さらなる飛躍を誓う。

講演Ⅰ

「鳥大発の革新的ながん治療薬の創出―基礎から臨床への橋渡し―」

医学部ゲノム再生医学講座 分子医学分野　**中村貴史**氏

◇座長　岡田太学部長特別補佐

講演Ⅱ

「コロナとの闘いの中で―ダイヤモンドプリンセスからワクチンまで―」

厚生労働省健康局長　**正林督章**氏

◇座長　景山誠二副学部長

講演Ⅲ

「日本医療研究開発機構を科学する」

日本医療研究開発機構 統括役　**難波吉雄**氏

◇座長　山本一博副病院長

鳥取大学医学部概要

〈理念〉鳥取大学医学部は、医学科、生命科学科、保健学科がお互いに連携を取りながら、生命の尊厳を重んじるとともに創造性に富む医療人や生命科学者を養成する。

- ■所在地　米子市西町86
- ■学生数　計1,534人
  - ・医学科　676人
  - ・生命科学科　170人
  - ・保健学科　500人
  - ・大学院医学系研究科　188人
- ■職員数　2,187人（附属病院含む）

歴史

鳥取大学医学部 75年の歩み

1945

1945年　米子医学専門学校開校

1946年　全国の医専で初の男女共学制を実施

創立当時の建物

女子学生3人が入学

初代校長・下田光造氏

1948年　米子医科大学に昇格

1949年　国立大学設置法により、鳥取農専、鳥取師範、青年師範、米子医大を統合して国立鳥取大学設立

講義風景（1949年）

1955

1955年　鳥取大学医学部同窓会発足

1957年　大学と学生会による学内開放（後の錦祭）始まる

市民に喜ばれた学内開放

1960

1960年　鳥取大学医学部後援会発足

1962年　脳幹性疾患研究施設を設置

1965年　創立20周年事業で記念講堂建設（68年竣工）

研究棟・講義棟・附属病院などの整備拡充進む

1966年　ステロイド医学研究施設設置

学園紛争で授業ボイコットが始まる

1975

1975年　創立30周年記念事業で「下田光造記念賞」制定

鳥取大学医療技術短期大学部設立

基礎Ⅰ号館（65年竣工）

学園紛争時代の市中デモ

1990 1985

1985年　創立40周年記念事業でシンボルマーク制定

1990年　全国の医学部で初の生命科学科開設

1995年　創立50周年記念誌発行、新外来・中央診療棟開院、同窓会館建設

外来・中央診療棟

1999年　医療技術短期大学部を改組し、保健学科開設

2002

2002年　総合研究棟竣工

2004年　鳥取大学が国立大学法人に

2005年　創立60周年記念事業でシンボルマーク改正

生命科学棟

保健学科棟

2011年　とっとりバイオフロンティア開設

2018年　とっとり創薬実証センター開設

鳥取県ドクターヘリ運航開始

日本医学教育評価機構より医学教育分野別評価の適合認定を受ける

2020年　大学院医学系研究科医科学専攻博士課程を設置

創立75周年（コロナ禍で記念式典を翌年に延期）

2021

2021年　創立75周年記念式典・記念講演会

2045 ◀◀◀

2045年　創立100年

総合研究棟

とっとり創薬実証センター・とっとりバイオフロンティア

鳥取大学医学部創立75周年おめでとうございます

鳥取県医師会は、県民に安全で安心な医療を提供します

鳥取県医師会は、学術専門団体として「医道の高揚、医学・医術の発達と公衆衛生の向上による社会福祉の増進」を目的に活動しています。県内には、東部医師会、中部医師会、西部医師会、鳥取大学医学部医師会の４つの地区医師会があり、共に連携、協力して、県民の皆様へ安全で安心な医療を提供しています。

主な活動

1 生涯教育の推進　日進月歩の医学ですので、学術団体として最新医学の研鑽、生涯にわたって自らの知識や技能を磨く責務があります。そのため、医師向けの生涯教育を行っています。

2 病診連携・診診連携　医師は大きく開業医と勤務医に区分されます。身近なかかりつけ医（開業医）がプライマリーケアを担い、手術など入院治療が必要な場合は病院（勤務医）へ紹介する「病診連携」や、診療科以外の病気については専門診療科へ紹介する「診診連携」を行っています。

3 在宅医療の推進　病院を退院したあと、在宅医療の患者をしっかりとサポートする医師を増やしています。

4 地域医療、地域保健活動　医師は医療以外にも、予防接種、休日急患診療所、学校医活動、産業医活動、健康スポーツ医活動など、地域での様々な保健活動を行っています。

5 公開活動　公開健康講座（毎月第３木曜日。※現在はコロナ禍で休講中）、健康医療相談（毎週木曜日。精神科（第１木曜）内科（第２、４木曜）、整形外科（第３木曜）。健康なんでも相談室「鳥取県医師会Ｑ＆Ａ」、保健の窓を毎週木曜日、日本海新聞に掲載中。

かかりつけ医を持ちましょう！

「かかりつけ医」とは、なんでも相談できるうえ、最新の医療情報を熟知して、必要な時には専門医、専門医療機関を紹介でき、身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師です。新型コロナウイルス感染症など不安な方は相談してください。

日本医師会キャラクター「日医君」（鳥取版）

公益社団法人　鳥取県医師会
会長　渡辺　憲
680-0055　鳥取市戎町317
TEL0857-27-5566　FAX0857-29-1578
https://www.tottori.med.or.jp/

鳥取大学医学部創立75周年おめでとうございます

鳥取県健康づくりシンボルキャラクター げんきトリピー

鳥取県健康対策協議会は、健康に関する諸問題の調査研究と県民健康の保持増進に努めています。

健康対策協議会とは（略称：健対協）　鳥取県健康対策協議会は、「健康に関する諸問題の調査研究と県民健康の保持増進に寄与する」目的として鳥取県医師会、鳥取大学医学部、鳥取県の三者構成で昭和46年1月に発足し、今年で50周年を迎えます。

健康対策協議会の活動　がん登録、公衆衛生活動、各種がん検診（胃がん、大腸がん、肺がん、乳がん、子宮がん）の精度管理などを13の専門委員会で取り組んでいます。

特定健診・がん検診を受けましょう！

たとえ医療機関に通院していたとしても、検診を受けると治療中以外の病気が見つかることもあります。受けておけばよかったでは遅いのです。生活習慣病やがんは早期発見、早期治療が大切です。

鳥取県健康対策協議会
（鳥取県医師会・鳥取大学医学部・鳥取県）
会長　渡辺　憲
680-0055　鳥取市戎町317
TEL0857-27-5566　FAX0857-29-1578
URL:https://www.kentaikyou.tottori.med.or.jp/

鳥取大学医学部創立７５周年
おめでとうございます

１００周年に向けて更なる発展を
ご祈念申し上げます。

公益社団法人鳥取県西部医師会
会長　根津　勝

鳥取大学医学部創立75周年おめでとうございます

支部・支部長

関東	水之江義充（学24）
東海	可世木　博（学27）
近畿	今本　治彦（学27）
播州	松下　健次（学27）
鳥取	安陪　隆明（学34）
倉吉	山本　敏雄（学19）
松江	古澤　正治（学12）
出雲	加藤　哲夫（学 2）
浜田・江津	木原　清（学12）
益田	河野龍之助（学12）
美作	石川重二郎（学20）
岡山	福田　和馬（学18）
広島	山肩　俊晴（学14）
山口	末永　和之（学20）
愛媛	稲田　裕（学15）
高知	小島　昭三（学 2）
福岡	田中　繁（学18）
宮崎	宮元　修一（学23）
沖縄	安里　良盛（学23）

同窓会館　平成7年（1995年）10月完成
（医学部創立50周年記念事業）

歴代会長

昭30年度	名誉会長	下田光造
〃		浅越嘉威
昭31年度 ～ 昭34年度		山崎三省
昭35年度 ～ 昭38年度		田中　潔
昭39年度 ～ 昭41年度		綾部正大
昭42年度 ～ 昭59年度		森田隆朝（大 3）
昭60年度 ～ 平11年度		辻谷賢三（専 1）
平12年度 ～ 平21年度		松本　久（学 2）
平22年度 ～ 平29年度		長田昭夫（学 2）
平30年度 ～ 現在		魚谷　純（学21）

同窓生数（令和3年4月現在）

医学科	6,750名
生命科学科	1,215名
保健学科	2,745名
計	10,710名

鳥取大学医学部同窓会
〒683−0826　米子市西町88−2